

ユートピア

かべの耳が聞いた話

清水 光子

ある日ある時

——きのうのテレビごらんになった？

——ええみましたわ。あの「零蔵からの教育」とかって、あれでしょう？

——そう、私、何だかぐらついちちゃったの。うちの子、これでいいのかしらって。

——私もよ。来年学校でしょ。バスに乗り遅れたんじゃないかって感じ……。

——そうねえ。だけど私ね、あとでよく考えてみたの。それで……。

——どうなの？

——だって、あの漢字のお授業、あれで字を本当に覚えたかしら、と思ったの。それとね、ああしてお話聞かせた字を教えたって、それに「狼」なんて字を覚えたって、どうってことないんじゃない？

——だけど、記憶することは能力を開発するってお話だったわねえ。

（かげの声 「なかなかよくみてますな」）

——そうなのよ。だったらあんなお話でなく、もっと楽しくできないものかって。

（かげの声 「いい線いってる」）

——あら、あなた、うちのババみたいなことおっしゃるわ。ババったらあれ見ていて、なあんだ、つまらん話だ、ですって。漢字を教えるためのお話なんでしょう。ウサギとか、橋とか出てくるあのお話、面白くはないわね。

——私もそう思ったの。それに、きいているお子さんや、漢字カードをいじっているお子さんたちの顔、うれしそうじゃなかったわね。

— そうですね。うわの空みたい
な……。

— それに「知能」っていうことがた
くさん出てきたじゃない？ だも
んで、うちの主人はね、知能がのびる
ばかりじゃ、人間ってそれだけじゃ
ないんだから、○夫に何だかんだ今
になって教えるな、っていうのよ。
あの子、あまりI・Q高くないもの
で……。

しばらく一同無言、ややあって

— あんなふうに教えられてなくても、
うちの子、このごろ外歩いてい
ると、看板なんかの字、あれ何て読む
のって聞いてうるさい位。

— うちもなの。幼稚園に持って行くタ
オルにひらがなで名前書いたら、漢
字で書いてって言うのよ。

— 字とか、何かにとっても興味をもつて

いるのはたしかね。

— 好奇心のかたまりみたいなの。それ
をつぶさないようにしたい、とは思
うわ。

— とにかく幼稚園が楽しくてたまらな
いのね、今は。

(かげの声 「お立派ですよ、そのとお
り」)

— この間、○○○のおけいこの先生が
お休みというお電話があったら、○
子ったらああうれい！ なんてい
うの。喜んで行ってると思ってい
たのに。

— ほら、○組の○ちゃん、お勉強に行
ってらっしゃるでしょ。I・Qが十
いくつ上がったって、ママ、喜んで
いらしたわ。

— ところが、おうちでとっても荒れる
んですって。妹さんをぶったり、物

を投げたり……。

— そうですね、幼稚園で机にじっとし
てるんで、先生が「○ちゃん、気持
悪いの？」ってきいたら、「何でも
ないよ」って。先生が熱もないから
って外へ誘っていらしたそうよ。

— そうなると勉強させるのも考えちゃ
うわね。

— うちのババの言い草じゃないけど、
熱くならないうちに鉄をうってもだ
め、ってことね。

(かげの声 「名言です」)

— あら、お迎えに行かなくちゃ。また
「何分遅れたよ」なんていわれちゃ
う。

— そうね、行きましょう。

(かげの声 「話し合うっていいこと
すな。皆さん、すーっとしたかな？」)

(音羽幼稚園)